

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

南アジアの構造変動をネットワーク型共同研究で追究する〈基幹研究：南アジア地域研究〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三尾, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009955

南アジアの構造変動をネットワーク型共同研究で追究する

三尾 稔

拠点型ネットワーク研究事業

南アジア地域研究プロジェクトは、人間文化研究機構の主導のもと2016年度から6年間行われた拠点ネットワーク型地域研究である。拠点ネットワーク型とは、機構との協定に基づき国内の大学・研究機関に研究拠点を設置し、各拠点が共同的研究を実施する研究事業形式を指す。南アジア地域研究は、京都大学に設置された拠点を中心拠点とし、さらに民博を含む4大学・1研究機関に置かれた拠点が参加した(図1)。なお、民博拠点はとくに研究事業の国際化を担う副中心拠点という位置づけで参画した。

本プロジェクトは中心テーマとして「グローバル化する南アジアの構造変動」を掲げ、同地域の政治、経済、社会、文化など全領域にわたる構造変動の実態をグローバル化との関連のもとで解明することを目標とした。各拠点はこの目標に沿った研究テーマを設定し、現地調査や研究会を実施し、成果の公開・共有を行った。また、拠点ごとのテーマを横断するかたちで南アジアの持続的・包括的・平和的発展のための諸課題を検討し、今後を展望する国際シンポジウムをプロジェクト全体の事業として毎年1回開催した。国際シンポジウムには南アジア諸国をはじめ欧米からも多数の研究者を招聘し、各拠点の研究者と活発な議論を行った。その成果論文集はRoutledge社からNew Horizons in South Asian Studiesシリーズとして刊行されている。

研究の国際化

プロジェクトの副中心拠点としての民博拠点は、先述の全体事業としての国際シンポジウムの企画・運営や英文成果論文集の編集のサポートにあたったほか、東アジアや東南アジア諸国にある南アジア研究センターを連携させる「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム」の設立と運営を主導した。図2に示した通り、このコンソーシアムには現状では東アジア・東南アジア諸国が参加しているが、南アジアの政治経済的な重要性の高まりや、同地域との関係の緊密化などを背景として、これらの諸国では南アジア研究が活発化しつつある。これら諸国は歴史的にも南アジア地域と深い関係を築いており、それぞれが特色ある研究を展開している。しかし、東部アジア諸国の南アジア研究は相互の連携を欠いており、分析の視角や概念は長く南アジア研究の主流であった欧米のそれを標準とする傾向が強い。本コンソーシアムは、これらの諸国間の研究連携を深めるとともに、南アジアとコロナル/ポスト・コロナルな関係性とは異なる関係を築いてきたこれら東部アジア諸国独自の研究視角や概念を模索することを目標として始められた。具体的事業としては各国が順番に幹事となり毎年国際シンポジウムを開催し、これを契機に研究交流を深めている。新型コロナウイルス流行拡大のもとでもシンポジウムはオンラインで開催し、コンソーシアム構成国だけではなく南アジア諸国からの参加も見られるなど、交流は活発に進んでいる。2022年度からはじまる機構の次期地域研究事業でもこのコンソーシアムは継承される。現状は各国の南アジア研究の経緯と特色の相互把握が進んでいる段階で、東部アジア独自の研究視角の開拓という目標については未だ萌芽的な状況にある。この目標の追究が今後の課題となる。



図1 南アジア地域研究プロジェクトの全体像 (作成 南アジア地域研究プロジェクト)

民博拠点の研究成果と課題

一方、民博拠点には全国から40名あまりの研究者が参加し、おもに社会・文化人類学的な視点から南アジアの人と社会がグローバル化にどのように応答し、自らが主体となって新しい文化と社会を作り出しているのかという問題の解明を拠点独自の課題として研究を行った。研究指針としては以下の2つ



図2 アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム参加研究機関
(作図 竹村嘉晃)

の観点を掲げた。すなわち人の移動の活発化のなかで、コストや共通の出身地域などの社会的資源がいかに関活用され、多次元・多方向的なネットワークのなかでエージェンシーが発揮されているかを解明する「南アジアの社会的レジリエンス」、及びグローバル状況下で南アジア発のモノ・情報・価値が他地域の文化や社会と相互作用を起し、それが再び南アジアの社会や文化の状況を変化させてゆくという現象を環流現象と定義し、その動態を解明する「環流する南アジア」である。

民博拠点では、具体的には上記の指針のもとで、「社会変動と親密圏」「移民・移動」「音楽・芸能」「布」「宗教」の5つの班に分かれて研究会を重ねた。各班の成果を共有するため年に一度全体研究会も開催した。

各班の研究概要は下記の通りである。「社会変動と親密圏」班は、南アジアの構造変動を家族とジェンダーの視点から解明するため、女子教育、女性就労、結婚、家事労働、世代間変化などの具体的テーマに即して政治経済的变化とミクロな親密圏の変化との連関を捉えた。「移民・移動」班はトランスナショナルな移民研究の深化をめざし、移民・移動の経験やこれによるコミュニティ、家族、規範、信仰、芸能などの変化、また移民・移動を介した人びとのつながりや地域社会の再編などの課題の解明にあたった。「音楽・芸能」班は南アジアの音楽と芸能のグローバルな伝播と受容を明らかにすることを目標に、古典音楽や儀礼に使われる弦楽器の来歴と地域的な多様性、演奏家や演じ手の国境を越えた移動、南アジア文化の表象としての芸能のグローバルな環流を具体的な事例から考察した。「布」班は、南アジアにおける布の機能や役割を理解する枠組みを提示することを主要なねらいとし、布の社会的、宗教的、政治的、経済的役割や機能を明らかに

三尾 稔 (みお のる)

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。専門は文化人類学、南アジア地域研究。共編著書に『現代インド6 環流する文化と宗教』(東京大学出版会 2015年)、*The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements.* (Routledge 2021)、編著書に『南アジアの新しい波』(上・下巻) (昭和堂 2022年) などがある。

し、その多様性や普遍性をあぶり出すことを試みた。「宗教」班は、今世紀の南アジアの国家と宗教の関係をテーマに南アジア各国を比較し、「宗教コミュニティ」概念がマジョリタリアン・デモクラシーとの結合を深める南アジアの宗教と政治の状況に関する知見の共有と深化を図った。

拠点の研究成果は南アジア地域研究プロジェクト全体の国際シンポジウムにも反映された。また「布」班はその成果を2021年度に民博の企画展(「躍動するインド世界の布」)で公開している。さらに、拠点独自の成果として2021年度末に上下2巻の成果論文集を刊行した。この論文集では、社会的レジリエンスに関しては、国家政策や社会的抑圧に対する受忍か抵抗かという二者択一的対応ではなく、利用できる社会資本資源を新しい文脈で読み替え、活用しつつ強靱に生きてゆくという生存のあり方や、トランスナショナルな移民が移住先で民族、宗教などの既存の紐帯を利用するだけでなく、移民社会での経験が出身地の社会変化に環流的に介入する状況が見出されている。一方、環流に関しては、南アジア文化のグローバルな流動のさまざまなレベルや担い手が100年あまりの時間軸のなかで具体的に描き出された一方、南アジア域内においては地域社会のなかに埋め込まれて維持されてきた事象がグローバル化のなかで商品化しているが、地域社会側はその状況を主体的に生かし新しい価値を生み出し、これが環流へと接合されてゆくという状況が示された。

最後に2つの観点到即して民博拠点のやってきた研究の今後の課題を概括しておく。社会的レジリエンスについては、本概念が既存の社会構造や機能が維持される傾向に注目するため、抑圧的構造に対抗し社会を刷新する動きや主体には十分注目できない難点が内在していた。社会的レジリエンスと社会を刷新しようとする主体との関係や、グローバル化状況における社会変化のメカニズムの解明が今後の課題である。一方、環流に関しては事例の積み重ねを踏まえた総合化が課題となる。その際、世界各地の循環としての経路形成には異なる分野間や時代の間でどの程度の異動が生じているのか。類似の経路が形成されるとしたら、その経路依存性は何かが生みだすのかといった観点が議論を深める糸口となるだろう。また、文化の真正性に関する言説をめぐるポリティクスに働く行為主体間の力学の解明、南アジア域内でのさまざまな文化の流動と環流の関係などの点も今後の解明が待たれる。当プロジェクトに触発された研究の継続に期待したい。